19　次の文章は上田秋成の『』の一節である（設問の都合で一部省略し

たところがある）。読んで設問に答えよ。　〈北海道大〉　二〇一四年度出題

　いとまがちなる窓のもとには、枕のみ友としてうち眠れる夢のうちに、庭のにあそぶ小鳥どものさへづる中に、の舌ばやなるが、人のものいふにかはらで独り言するは、「春ごとにこのいほに来てあそぶに、このあるじは何をわたらひにするともなき、イいたづら人なり。かくても世に住むかひありや。いと憎むべきものなり」といふ。にあそぶうそ姫、これを聞きて、「さればこのあるじは、もと都の人なるが、生まれつきて心せばく、世をわたらむとすれば、おひかりの恐ろしく、Ａ人は心の広きままに、悪しきといふことも偽りも、世の害にだにならぬことは、たくまずしてなすままなるを、それらを見聞くたびごとにうちもなげき、あるいは怒りなどもしつつ、また、書よめば、昔のみしのばしくて今の世をうとみ、芸にあそべば、古き世の人は上手も下手も心高しとあふぎ、今のまなこのつけどころをさげしみて楽しまぬにより、年月をいたづらに暮らすなり。世にあはれむべきものなり」とこたふ。駒王聞きて、からからと笑ひ、「さればこそ、Ｂ世のおごりものか。あさましの心ざまなれ」といふ。うそ姫いはく、「あるじは常によき衣を身にまとふことなく、甘きをくらはず、紙のふすま、紙のとばりにこと足りて、何ごとにも倹を守りげにて、おごれるを見ず」と。駒王いはく、「我がおごれるといふは、さることわりにあらず。あるじは、世にいふのやまひをつのらして、ロえ養はぬおろかさより、我をたふとしとは思ひあがらねど、世の人はみな濁れるものにする、心おごりの人なり。このあるじが思ふにかなふ世も人も、いにしへよりあることなし。のやまとの書どもに、あかず教ふるも、世の人の直からず、おほかたはねぢけのみゆくをなげきてにあらずや。（略）さてそれらが悟れる顔に書きあらはす、その墨のかわかぬあひだも、我は及ばぬことを知りつつ、いひいづるががしこのしわざなりけり。世におしたてられても、おのれ濁らぬはまづよしといへり。それも表面を濁らざれば、世にはまじはりがたし。Ｃこのあるじがやからは、これ行ふことあたはぬものなり」。

注　うそ姫―─の異名。

　　おひかり―─「負ひ借り」で借金の意か。

　　癇癖―─を起こしやすい性質。

問１　傍線部イ・ロを現代語に改めよ。

問２　傍線部Ａについて、「人」がどのような人であるかを明らかにして、五〇字以内で説明せよ。

問３　傍線部Ｂ「世のおごりもの」のあり方は、本文中に二通り示されている。違いが分かるようにそれぞれ簡潔に説明せよ。

◎問４　傍線部Ｃにおいて、「あるじ」はどのような人物と捉えられているか。本文全体を踏まえて六〇字以内で答えよ。

# 【解答と採点基準】

問１　イ＝役に立たない人

「無用の人」「怠け者」「閑人」なども可。

　　　ロ＝抑えることができない

「養ふ」の訳は「制御する」「飼い慣らす」なども可。

問２　Ａ世間の人は心が広いので、Ｂ悪事や噓でも世間の害にさえならなければＣこだわらずに放っておくということ。（48字）

「人」に修飾が付いていないものは全体０。

Ａ＝３〔「人」に「世間の」・「一般の」・「ふつうの」などの説明の付いていないもの及び「ままに」を理由で説明できていないものは０。〕

Ｂ＝３〔「だに」を類推（サエ）で説明できていないものは０。〕

Ｃ＝４〔「たくまずして」と「なすままなる」のそれぞれに対応した説明が必要。一つにまとめたものは減点２。〕

問３　・Ａ上等な着物や食べ物や調度に散財して、倹約を考えない贅沢なさま。

・Ｂ自分の尊さは誇らないが、世間の人を汚れていると見下す傲慢なさま。

二者が「贅沢」と「傲慢」との対比で書かれていないものは全体０。

Ａ＝５〔「上等な物を消費する」、「倹約（節約）しない」、まとめとしての「贅沢」などの表現がないものはそれぞれ減点２。〕

Ｂ＝５〔「世間の人を汚れていると思う」の内容がないものは０。「自分の尊さは誇らない」がないもの、まとめとしての「傲慢」などの表現がないものはそれぞれ減点２。〕

問４　Ａ古人を理想とし崇拝することで、Ｂ俗世の汚れを受け入れられなくなり、世間と交われずＣ現世を無為に過ごさざるを得ない人物。（57字）

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝２〔同意であれば可。〕

Ｂ＝６〔「世間と交われない」は必須。前半は「自分が汚れることができない」などでも可。〕

Ｃ＝２〔同意であれば可。〕

# 【現代語訳】

　すき間の多い（粗末な家の）窓のもとに、枕だけを友として眠っている（時に見る）夢のうちに、（こんな夢を見た。）庭の梢に遊ぶ小鳥たちがさえずる中に、駒鳥で早口な駒鳥が、人がものを言うのと同じように独り言をするには、「春（の来る）ごとにこの庵に来て遊ぶが、この家のあるじは何を職業にするわけでもない、問１イ役に立たない人である。こんなことでは世の中で生きる甲斐があるのか、いやあるはずがない。本当に憎むべき者である」と言う。下枝に遊ぶ鷽が、これを聞いて、「だからこのあるじは、もともと都の人であるが、生まれつき度量が狭く、世渡りをしようとすると、借金が恐ろしく、（世間の）人は心が広いから、（世間では）悪事だということも噓も、世の中の害にさえならないことは、こだわらず放っているのに、（このあるじは）それらを見たり聞いたりする度ごとに嘆きもし、あるいは怒りなどもしては、また、書物を読むと、昔ばかりが慕わしくて今の世を嫌い、芸に遊ぶと、昔の人は上手も下手も精神が高尚だと尊敬し、今の（人の）目のつけどころを軽蔑して楽しまないので、年月を無駄に暮らすのである。まことに哀れむべき者である」と答える。駒鳥が聞いて、からからと笑い、「だからこそ、この上ない『おごりもの（＝高慢な人）』であるのか。驚きあきれるほどひどい心の持ちようである」と言う。鷽が言うことには、「あるじは常に上等の衣を身に纏うことがなく、おいしい物を食べず、紙の粗末な夜具と、紙の几帳で充足して、何ごとにも倹約を守っている様子で、『おごっている（＝贅沢している）』のを見たことがない」と。駒鳥が言うことには、「私が『おごれる（＝高慢である）』と言うのは、そのような理屈ではない。あるじは、世間でいうところの癇癪の癖をつのらせて、問１ロ抑えることができない愚かさによって、自分を貴いとは思い上がりはしないが、世間の人は皆汚れているものだと考える、『心おごりの人（＝高慢な人）』である。このあるじが思うことにかなう世の中も人も、昔からあったためしはない。中国や日本の数々の書物の中で、飽きずに（繰り返し）教えているのも、世間の人が心が正しくはなく、多くは心がねじけていくばかりなのを嘆くからではないか。（略）そして学者たちが悟った顔で書き表す、その墨の乾かない間にも、自分は（理想の聖人たちに）及ばないことを知りながらも、書き付けるのが自分の利口さをひけらかす行為であることよ。世間で祭り上げられても、自分が濁らない場合は上出来と言ってよい。とは言え表向きは濁っ（たふりをし）ていなければ、世間に交わることは難しい。このあるじのような人たちは、これ（＝表面を濁して世間に交わること）ができない人である」。